



<講演抄録>1. 口腔扁平苔癬における口腔粘膜上皮に対する自己抗体の産生(第26回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	畠山 修一, 森 士朗, 藤澤 隆一, 手島 貞一
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	14
号	1
ページ	82-82
発行年	1995-06
URL	http://hdl.handle.net/10097/31499

第 26 回東北大学歯学会講演抄録

日時：平成 6 年 12 月 2 日

場所：東北大学歯学部 B 棟 1 階講義室

— 一 般 演 題 —

1. 口腔扁平苔癬における口腔粘膜上皮に対する自己抗体の産生

畠山修一，森 士朗，藤澤隆一，手島貞一（口腔外科学 2）

口腔扁平苔癬患者の血清より精製した IgG にビオチン標識をしたものを用い，免疫組織染色法およびウェスタンブロッティング法により，口腔扁平苔癬患者における自己抗体の産生について検討を行った。対象症例は，1987 年 10 月から 1992 年 2 月にかけての期間内に東北大学歯学部附属病院第二口腔外科を受診した，口腔扁平苔癬患者 8 例である。まず，正常者ビオチン化 IgG を用いて正常口腔粘膜組織凍結切片に対し，ABC 直接法による免疫染色を行ったところ，口腔粘膜上皮は染まらなかった。次に口腔扁平苔癬患者ビオチン化 IgG を用いて，同様に正常口腔粘膜組織凍結切片に対し免疫染色を行ったところ，口腔粘膜上皮細胞表面が染まった。また，口腔扁平苔癬患者ビオチン化 IgG による免疫電顕でも口腔粘膜上皮の細胞表面が染まっているのが分かった。以上の結果，口腔扁平苔癬患者 8 例中 7 例は，口腔粘膜上皮細胞表面に対し反応が陽性であったが，対照として用いた正常者は 5 例とも陰性であった。次に口腔粘膜上皮細胞表面と反応する扁平苔癬患者ビオチン化 IgG および正常者ビオチン化 IgG を用いて，ウェスタンブロッティングにより反応する抗原の分子量を検索したところ，分子量 9 万付近に特異的なバンドを認めた。口腔扁平苔癬患者および再発性アフタ患者ビオチン化 IgG を用いて同様にウェスタンブロッティングを行ったところ，やはり分子量約 9 万付近に特異的なバンドを認めた。以上の結果より口腔扁平苔癬患者血清中には，口腔粘膜上皮細胞中の分子量約 90 キロダルトンの分子を認識する自己抗体が存在し，本症が自己免疫疾患の範疇に属する可能性が示唆された。

2. 思春期性成長ピーク前における機能的矯正装置（Bionator）の下顎骨成長に対する効果

楠元桂子，佐藤亨至，三谷英夫（歯科矯正）

下顎骨の後退を示す上顎前突症の改善を目的として Bionator 等の機能的矯正装置が用いられるが，下顎骨成長に対する効果については賛否両論で，下顎骨の成長が促進されるという説と歯槽性の変化のみであるという説に分かれている。本研究では思春期性成長ピーク前に Bionator を適用した症例（Bionator 適用群）と適用していない症例を比較検討し，両者で下顎骨の成長量に差があるかどうか調べた。研究資料として，初診時骨格性上顎前突症と診断された女子 40 名の縦断的な側面頭部 X 線規格写真を用いた。そのうち，機能的矯正装置の適用を受けなかった女子 27 名を 2 群に分け，8 歳から 12 歳までの経年的な資料のある 17 名の資料を利用して，下顎枝長（Cd-Go），下顎骨体長（Go-Pog'），下顎骨全体長（Cd-Gn）の平滑化 3 次スプライン曲線を求め，それらの平均成長曲線を作成した。次に，この平均成長曲線を用いて残りの 10 名（control 群）における 8 歳から 2 年間の SD スコアの変化と Bionator 適用群 13 名（平均適用期間：9.5 歳～10.7 歳）における装置適用前後の SD スコアの変化を求めた。その結果，control 群では，下顎枝長，下顎骨体長，下顎骨全体長のいずれについても暦年齢相当 SD スコアは変化を示さなかった。それに対して，Bionator 適用群ではいずれについても SD スコアが増加しており，適用前後の SD スコアは 0.1% の危険率で有意差が認められた。以上のことから，下顎骨の後退による上顎前突症の改善に，思春期性成長ピーク前における Bionator 適用の有効性が確認された。しかし，Bionator の適用によって増加した SD スコアが成長終了時まで保持されるかどうかは不明であり，今後さらに検討していく必要がある。